

とらぶる・ばけーしょん

「来たね、夏の海へ！」

眩しい日差しが降り注ぐ真夏の砂浜に、元気の良い少女の声が響き渡る。

ビーチパラソルを肩に担ぎ、輝くような瞳で周りを見渡しているのは、青い髪を白いリボンでツインテールにまとめた少女　さくらである。

いつもはエプロンドレス風の衣装を身に着けているさくらだったが、真夏の海に合わせてか、今は古めかしい紺色のスクール水着姿になっていた。胸にはきちんと「さくら」と書かれたゼッケンが縫いこまれているあたり、妙なところで芸が細かい。見た目が十代に届かないくらいにしか見えないため、正直なところ違和感は全く無かった。

「ね…姉さん、ちよっと待ってよっ」

そう言いながら、砂浜に歩いてきたのは、青い髪のショートカットが良く似合う少女　御影さくらである。

真夏の日差しに焼けた熱砂のためか、何やらぎこちない様子でさくらの元に近づいてくる彼女は、スク水姿のさくらとは違い、上下セパレートの水着を身に着けていた。普段の衣装をイメージしたその水着は、白と青をベースにしたオーソドックスな水着ではあるが、黄色っぽいフリルやリボンがアクセントとなり、明るく快活な印象の彼女に良く似合っている。

「あれ、双葉はどうしたのさ？」

そう言いながら、さくらは、肩から降ろしたビーチパラソルをパワフルな動作で砂浜に立て始めた。

「ちよっと着替えるのに手間取ってたから、もう少ししたら来ると思っよ」

足元の熱砂に慣れたのか、やっと落ち着いた様子の御影さくらが答える。

「むっ…パラソル立てるのを手伝って欲しかったんだけどなあ」

「私を手伝っよ」

御影さくらは、手に持っていたバスケットを砂浜に置き、必死にビーチパラソルと格闘しているさくらを手伝い

始めた。必要以上に巨大なそのビーチパラソルは、流石のさくらでも手に余るものだったらしい。

「ねえ…このビーチパラソルだけどさあ…」

「ん、なんだい、御影？」

やっと砂浜に立ち、徐々に開き始めたビーチパラソルを見て、御影さくらが困惑の声を漏らした。

「あんまり、センス良くないよね…」

「これしか無かつたんだよ…」

完全に開いたパラソルには、何故か大きくうにゆうが印刷されていた。それを見て、二人のさくらは顔を見合わせ、ただ残念そうな笑みを浮かべる。

「遅れてすみません」

聞き覚えのある声と共に、腕に水色のバンダナを巻いた少女　　双葉が、ただきちさんとうにゆうを従えるようにして、さくら達のところに向かってきていた。

「双葉、遅いぞっ…って、えっ？」

ビーチパラソルを立て終え、やれやれといった雰囲気双葉の方に振り返ったさくらは、目に飛び込んできた双葉の姿を見て、驚きの表情を浮かべたまま、固まってしまった。

「ん…どうしたの？」

そんなさくらの様子を不思議に思った御影さくらが、何気なく双葉の方に目を向ける。

「なっ…双葉っ？」

双葉の姿を目にした御影さくらも、目を見開くようにして、思わず言葉を失ってしまった。

「そ、そんなに見ないでくださいよ…」

二人の視線を受け、恥ずかしそうな仕草を見せる双葉は、赤色のピキニを身に着けていた。ちょっと背伸び気味の水着ではあるが、双葉のスリムな体型によく似合っている。また、さくら達よりもちょっとだけ成長しているバストも合わせて、しっかりと色っぽさも演出していた。簡単に言えば、二人のさくらよりは格段に大人っぽい。

「……………」

無言で双葉を見つめていたさくらが、ふと自分の胸元に視線を向ける。しかし、残念な事に、そこには『さくら』と書かれたゼッケンともに、大平原が広がっていた。これが格差というものか、その違いは圧倒的だった。

「やっぱり、双葉さんには、このくらいの水着が似合うようですね。お勧めした甲斐があったというものです」

双葉の隣に浮かんだただきさんが、相変わらずの無表情のまま感想を漏らす。どうやら、双葉にこの水着を薦めたのは、ただきさんだったらしい。流石は相方と言ったところか、意外に見る目はあるのかもしれない。

「確かによう似合つとるな、ええ感じやないか」

本来の相方であるさくらではなく、双葉の隣に立つたうにゆうも、双葉の水着姿を見て頬を緩ませている。見かけは性別不明だが、彼も男である。ある意味、とても分かりやすい反応だった。

「まあ、お二人の水着も子供っぽくて、よくお似合いですよ」

ただきさんの言葉に、ビクンと反応するさくらと御影さくら。傷口に塩を『これでもかっ！』というくらいに塗りこめる言葉を受けて、二人のさくらからは、目に見えるはずの無い黒いオーラが立ち上りつつあった。

「ちよつと、ただきちゃん、ダメです、そんな…」

慌てて双葉が、暴走しかかっているただきさんを止めようとしますが、当のただきさんはどこ吹く風である。ふわりと、ただきさんがさくらの前に移動し、その姿を改めて一瞥した。

「…なんだよう？」

ちよつとだけ頬を膨らませたさくらが、ただきちゃんに挑みかかるような目を向ける。

「今時、一部のマニアにしか需要の無いスク水で海に来るとは、まさに無謀の極みですね」

「な…なっ？」

「せめて白スク水なら救いもあったでしょうが、紺色旧スク水とは、懐古趣味にも程があります」

「ぐっ…」

「加えて、なんのくびれも無い、そのドラム缶体型では勝負になりませんよ」

「大きなお世話だっ！」

とうとう我慢の限界を超えたさくらの腹パンチが、ただきさんのどてっ腹にクリーンヒットした。

